先進6団体が〝里山戦略〟

勝山で「達人」サミット

「SATOYAMA国際会議2018－ふくい」は11日、勝山市の県立恐竜博物館で開かれ、「全国『里の達人』サミット」が行われた。県内外6団体の代表者が、環境保全や人材育成などの先進事例を紹介。中越里山の活性化策を探った。（コウノトリ支局・大谷純平、伊藤雄樹、宮崎雅之）

SATOYAMA 国際会議 in ふくい

環境守り経済と両立

山田晃弘製紙（福井市）　山田晃弘社長

大阪府高槻市の「観光のヨシ」で社員ら約7人が刈り取り、2001年から紙を生産している。風景は平安歌人に詠まれたほど美しく、日本人代表するヨシ原。水の浄化作用があるが、手入れされなくなって荒廃が問題になっている。

木材パルプと配合し、高コストながら上質の紙を開発。「昔ながらの景観を売り出し、自然環境に関心を持つ愛用ファーカーなど国の企業から注文が舞い込んだ。

「エコ」が注目される中、企業もイメージアップのため」環境保全に協力する動きが加速している。里山の資金は経済活動と両立できる」

サミットの基調を述べる「里の達人」6－11日、勝山市の県立恐竜博物館

山野草保護 都会から

NPO法人「山野草のまつ」代表、くりの会（小浜市）　福井県山野草保護事業

生山野草の保護にひんしたスズランやサクユリなどの育生、ビオトープを活用した都会の人にはできない取り組をする。大阪のシンクタンク仕事を担う。「守る」ニア自然調査でも人が地域の手助けのおかげで、自然の野草を守る会」へNPOの無農薬栽培など、活動の幅「集落保全」として里地・里山の保全にも広がることもできている。

8団体の事例発表に先立ち、東京農業大名誉教授の進士五十八氏が講演した。要旨はの通り。

×　×　×

日々の農作業に追われる農村の人より、都会の人の方が農業農村に敏感といわれる。しかし、頭で理解しているだけで現実の行動は別。1円でも安いものに流れる。

日本の国土は水が豊かだから多様な名称が生まれる。こうした物語をつむぐ創造の営みや都会と農村の共生の知恵を学ぶ。

進士名誉教授（東京農大）講演

都市と農村の共生について語る進士氏

農村に都会人呼び込もう

で暮らす人が農業に関心があるが、安い物に流れるのか、地場の無農薬の食材を買うのかを問う。

ドイツ人が日本の農地をかし、首都化で人手が減らしの手法」と、ランドステープ・ダイバーシティー（景観多様性）がある。その土地ならではの人の自然の価値に気付ける感性を、都市と農村で共有したい。

ル・ダイバーシティー（暮ている。マンパワーが必要だ。

それには、交流拡大や組織づくり、情報の活用、財源の工夫が必要だ。実行できる人が「里の達人」だ。「里山が荒れているから保全に参加を」ではなく「里山で活動すると生きがいがある」と都会に呼び掛けるなどがいい。楽しみながら保全に参加する人を増やしていくことが大切だ。

産学官民で古里守る

西条・山と水の環境機構（広島県）　中越信和・広島大大学院教授

西条・西条は観光名所の盆地。豊かな清流が流れ、酒米作りに適した気候で酒造りが盛ん。酒造組合がある。日本酒の蔵元9社が盆地の環境保全を行う。

「産学官民」による環境保全（2001年設立）。

地元高校生らの協力で山手に入れし、保水力のある土壌を守る。開発は抑制化して酒米作りに活用、持続的な循環サイクルを生み出した。「地元お行政も一丸となった取り組みが大事

国蝶伝える保全意義

北杜市オオムラサキセンター（山梨県）　藤原治館長

北杜市オオムラサキセンターが年間1万匹以上繁殖する日本最大級の生息地。近年は減少が続いているが、市民の「守る会」が発足した。1989年センターのある北杜市長坂地区は、国蝶オオムラサキ

年に設立されたセンターでは、国蝶を観察・飼育するだけでなく、生活環境とともに近くの里山の保全に力を入れている。

里山の荒廃が進む中、子どもたちが自然と触れ合う機会を増やそうと、小学生や大学生を対象に、小学生や大学生を対象に、山里の植物やキノコの観察、里山の保全などを開いている。「オオムラサキなど昆虫が生きる環境シンボルに据えると保全の意識が広まりやすい」

リーダー育成へ連携

金沢大里山里海プロジェクト（金沢市）　中村浩二特任教授

金沢大里山里海プロジェクトは、石川県能登地域を拠点に「能登里山マネジャー」養成事業を07－11年度実施。2年間のカリキュラムで人材や地域、小学生や大学生を対象に、山里の植物やキノコの観察、里山の保全などを開いている。「オオムラサキなど昆虫が生きる環境シンボルに据えると保全の意識が広まりやすい」

コウノトリ地域財産

コウノトリの郷づくり推進会（小松山林管理署長区）　富川健三会長

後にひなが生まれた同地区で、コウノトリをシンボルに自然環境の保全に取り組む。野生鳥の絶滅前に国内で最

た歴史があり、コウノトリは地域の財産。コウノトリ一定二一期などの意識を込め、ビオトープづくりや生き物観察会、安全な農作物作り、資料の収集を行っている。最近兵庫県豊岡市、韓国四日

国蝶伝える保全意義

北杜市オオムラサキセンター（山梨県）　藤原治館長

北杜市オオムラサキセンターが年間1万匹以上繁殖する日本最大級の生息地。近年は減少が続いているが、市民の「守る会」が発足した。1989年センターのある北杜市長坂地区は、国蝶オオムラサキ

年に設立されたセンターでは、国蝶を観察・飼育するだけでなく、生活環境とともに近くの里山の保全に力を入れている。

里山の荒廃が進む中、子どもたちが自然と触れ合う機会を増やそうと、小学生や大学生を対象に、山里の植物やキノコの観察、里山の保全などを開いている。「オオムラサキなど昆虫が生きる環境シンボルに据えると保全の意識が広まりやすい」

リーダー育成へ連携

金沢大里山里海プロジェクト（金沢市）　中村浩二特任教授

金沢大里山里海プロジェクトは、石川県能登地域を拠点に「能登里山マネジャー」養成事業を07－11年度実施。2年間のカリキュラムで人材や地域、企業トップを招き講義や実習を受け、地域の課題解決とも交流した。

育成を目的にしたのは現場に配置する「能登人材」、地域づくり総括型人材育成を目指す「コミュニティー人材」、人材をつなぐ事業を創出する「リーダー人材」。62人が修了し、うち行政から9人が採用された。12年度からは金沢市に拠点をつくり総括型人をスタート。「人材育成は継続、連携が重要」

コウノトリ地域財産

コウノトリの郷づくり推進会（小松山林管理署長区）　富川健三会長

後にひなが生まれた同地区で、コウノトリをシンボルに自然環境の保全に取り組む。野生鳥の絶滅前に国内で最

た歴史があり、コウノトリは地域の財産。コウノトリ一定二一期などの意識を込め、ビオトープづくりや生き物観察会、安全な農作物作り、資料の収集を行っている。最近兵庫県豊岡市、韓国四日

山・板口地区との交流にも力を入れる。

国際的な地区が加盟する湿地若狭三方湖周辺湿地ラムサール条約湿地はあるが、「コウノトリが生息する豊かな湿地を目指す」